

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The northern front of Ayurveda : introduction of traditional Mongolian medicine

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 利光, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009459

アールヴェーダの北方前線 — モンゴル医学紹介 —

利 光 有 紀*

I. はじめに

中国では、東洋医学が西洋医学と肩をならべて医療現場で機能している。さらに、内モンゴル自治区の場合は、そうした東洋医学のなかに「中医」と「蒙医」が並存する。地方の病院においても、「西医」「中医」「蒙医」という三部門が並列しているのである。この蒙医すなわちモンゴル医学には、接骨などのように他の医学よりもすぐれていると一般に認識されている分野があり、「蒙医」の利点の一つとなっている。くわえて、漢語になじみの少ない牧民などにとっては、モンゴル医学がもっとも身近な医療であり、そのことが「蒙医」の大きな存在理由ともなっている。

現在、モンゴル医学にかんする主要な研究機関としては、内モンゴル自治区の首府フフホト市にある内蒙医学院と、シリントウ市にある蒙医研究所などがあげられる。後者は、とくに馬乳酒による治療とその研究で有名である。草原の中に立地した町にあるため、フフホトでは入手困難な馬乳酒を治療に利用することができ、多くの臨床データがそこで蓄積されている。前者は、研究機関であると同時に教育機関でもある。モンゴル医学の教育は、こうした大学系列とはべつに、伝統的な伝承方式によっても実践されている。すなわち、ラマ教寺院での修行である。たとえば青海省のタラス寺では、内モンゴル自治区各地からあつまった青少年が、チベット語をかいして医学書を暗唱しているという。

こうした伝統的な教育実践が如実にしめしているように、今日のモンゴル医学の体系は、チベット仏教（ラマ教）によってもたらされた。その理論的基盤は、チベット経由で伝来したインド医学によるところが大きい。いわば、アールヴェーダのモンゴル・バージョンがいきっているのである。

チベット仏教は、モンゴルよりさらに北方のシベリア諸民族にまで、若干の影響をおよぼしている。しかしながら、そこではチベット仏教に包含されていた医学体系が受容されることはなかった。換言すれば、モンゴルこそがチベットの医学を受容した最北地域である。それは

また、モンゴルがアールヴェーダの最北前線であることを意味している。

そもそも医学に関してまったくの素人である私が、モンゴル医学に関心をもつようになった理由もまた、インドからチベットをへてモンゴルへという文明の流れにある。モンゴルの文化を歴史的にひもとく視点として、こうした文明の流れは必要不可欠である。とりわけ医学の分野は、信仰的側面が政治的理由から否定されて以来急速に衰退した今日でもなお、かつて知の総体系であった宗教のなかの実利的側面としていきながらえている。現存するモンゴル医学を理解することによって、モンゴルにおける文明の受容と文化の独自性を把握することができるのではないだろうか。モンゴル医学は、かつて宗教に包含されていた医学の今日的姿である。と同時に、モンゴルを理解するうえでの一つの重要な鍵となるにちがいない。

私自身は、フフホト市に滞在した10カ月のあいだ、きわめて健康状態にめぐまれていたため、残念ながら身をもって治療を受けた体験を紹介することができない。実体験レポートにかえて、一つの小論文を訳出し、モンゴル医学の紹介としたい。基礎理論の発展史にかんする論文である。

著者のジグメド氏は現在、内蒙医学院の助教授として、モンゴル医学基礎理論研究室を主任する。院内での治療、研究、教育に多忙なうえ、しばしば自宅においても遠路はるばるたずねてきた牧民を診察している。『オールドス人名録』によれば、1938年にうまれたソロンゴト姓の一族で、曾祖父に有名なモンゴル医師ボルロンがいるとある。幼少のころから、モンゴル医学に興味をいだいていた、という。こうした生い立ちあるいは血筋が、彼をモンゴル医学にむかわせたようである。卒業後も内蒙医学院にのこり、チベット語ならびにモンゴル医学をおさめ、その研究に従事するようになった。しかし、文化大革命という不幸な10年間の混乱は、研究活動の停止を余儀なくした。氏自身、獄につながれた経験をもつ。現在は、モンゴル医学とくにその基礎理論に関係する研究で指導的役割をはたしている。主編者の一人として『中国医学百科全書・蒙医学』（モンゴル文、1986年、内蒙古

* 国立民族学博物館

科学技術出版社、赤峰市)においても、概説史や理論にかかわるほとんどすべての項目を担当執筆する。おもな著書および論文については、末尾の目録を参照されたい。

ここに訳出したものは、学生の勉学に資するという掲載誌『内蒙古医学院論文選』(モンゴル文)の性格を反映して、モンゴル医学理論の全容をコンパクトにまとめたものとなっている。きわめて簡略的ではあるが、それだけにかえてチベットを経由してインド医学と中国医学を受容し、さらに中国やイスラム圏からの影響を受けて発達してきたモンゴル医学の歴史的概要を、むしろ容易に把握することができよう。

翻訳にさいして、饒舌な部分の削除と若干の加筆訂正が著者みずからによっておこなわれた。ここでは、そうした訂正後のものを全訳し、便宜をはかるために見出しを付している。また、原注は基本的な一次資料をしめすにとどまるので、適宜本文のなかにくみこみ、注としては訳注を補足した。

医学を歴史的視点からといなおすという通時的分析と、生命にかんする諸知識体系の共時的分析とは、一つの車軸の両輪であるようにおもわれる。そうした研究にとって、本稿拙訳がわずかなりとも資すれば幸いである。

II. 翻訳：ジグメド著『モンゴル医学における基礎理論の発展史』

モンゴル医学の基礎理論は、モンゴル医学のすべての部門の理論をみちびくものであるがゆえに、きわめて重要な位置をしめる。だからこそ、あらゆる面からの整理と、さらなる体系的な研究がせまられている。そしてここ数年、少なからぬ人々の注目をあつめ、研究されるようになってきた。本稿では、モンゴル医学における基礎理論の発展史にかんして、数年来の研究成果を簡単に紹介したい。

<歴史的概要>

モンゴル医学の基礎理論とは、モンゴル民族の生活の特色や風土の特質に適応した、古くからの伝統的なモンゴル医療経験をもとに成立したものである。そして、それは長いあいだ治療実践をみちびいてきた。その発展過程において、「古代の素朴唯物主義」「自然発生した帰納的な陰陽道」および「五大元素思想」などによってみちびかれるとともに、チベット族や漢族の古代薬学理論からもその精髓を吸収して、完全な理論として体系化され、発展したものである。

<体系化以前の理論的萌芽>

(1) 寒熱二分法

伝統的モンゴル医療において、十四世紀あるいはそれ以前から、病の性質を寒熱という二つに分類して説明する概念がうまれた。

具体例をあげておこう。約二千年前の中国医学書『内経』のなかにしるされた古代北方民族の「灸」および、のちに『四部医典』にしるされた「モンゴルの灸」(注1)は、熱い”震攝者”(注2)によって寒性の病をなおすという思想でみちびかれた治療法である。また、今日までうけつがれてきた「性質は冷たく、渴きをいやし、暑気をおさえる」(注3)馬乳酒の医学的利用、および氷・石・鉄・カエルなどをもちいた寒性のジン療法(注4)、さらに放血療法(注5)はいずれも、寒い震攝者で熱性の病をなおすという思想にもとづいている。

以上のように、病の性質を寒熱に二分し、熱性のもので寒性の病を、寒性のもので熱性の病をなおすという思想は、治療実践からみちびかれた結果の理論である。さらに、この思想は、寒熱の関係が均衡しているもとで人は健康であるという生命の基本思想となって発展した。こうして、寒熱が拮抗して統一するという理論的概念は、古代の伝統的モンゴル医学の治療実践をみちびく一般的綱領となっていた。これは、今日もなおモンゴル医学にうけつがれている、寒熱拮抗統一理論の萌芽といえよう。

(2) 飲食療法

モンゴル民族の祖先は、栄養を摂取することによって病とたたかう体内の力を発動するという方法はかなり古くから重視していた。とりわけ、遊牧生活に適応した乳製品と肉汁を中心とする飲食によって病をなおすことについては、ゆたかな経験をつんできた。

元朝の皇帝料理人でありかつ医者であるフスフイは、その著書『飲膳正要』(1330)において、当時のモンゴル飲食、およびそれらによって病を治療し、栄養を摂取していた経験についてかなり整理している。馬乳酒などの乳製品と羊肉などの肉食、さらに果実、穀類など多くのモンゴル食の味・性質・効用について詳述し、理論化している。これらの記述はみな、モンゴル医学における、食によって栄養を摂取するという理論の発展にとって、重要な基盤をなしたものである。

(3) 身体組織にかんする知識の蓄積

身体組織にかんする知識は、かなり古くから蓄積されてきた。狩猟をし、家畜を殺して主食としていたモンゴル人は、動物の身体組織についての知識が豊富であり、またそれらによって人間の身体組織を類推していた。

そうした当初の知識は、チングス・ハン出現前後にい

たって、戦闘をくりかえしていたモンゴル軍のもとで発生していた傷の治療に応用されるようになる。すなわち、十三世紀になると、戦場でただちに傷をなおす外科医療がこころみられ、人体を解剖して研究するようになっていたのである。（注6）

こうして、身体組織にかんする知識はよりいっそう豊富になるとともに、傷をなおす外科医療の理論および実践もおおいに発展した。

そしてまた、このころから、モンゴル医学において外科が独立した部門として発達したのである。

（4）振動治療に内包された医療概念

モンゴルの伝統的治療には、臓腑の損傷および振動による傷害をドムノホする、つまり位置ずれをなおすとか、「モンゴルの脳をドムノホする方法」（注7）として有名な脳振治療がある。いずれも、モンゴル独特のユニークな伝統的治療方法である。（注8）

これらについて、治療の基礎となる理論的基盤を記録した史料はえられない。しかし、多様な具体的治療方法を相互に検討すると、いずれも振動をあたえるという方法をとっており、それをみるかぎり、古代の人々はずでに一種の理論的思考をそなえていたものとおもわれる。

今日、これを科学的にいうなら「振動を振動で治療し、まず振動をあたえたのちに安静にする、こうして振動と安静を結合する」（注9）というような帰納的形式で理論的基盤としていた、と総括できよう。

上述の四項目は、かつての伝統的モンゴル医療における理論であり、後世に体系化された理論と比較するならば、萌芽的性格をもつ医学理論であるといえる。

<古代哲学の影響>

医学史の発展に注目すると、古代における伝統的医学理論は当時の素朴な唯物論や自然発生した帰納的な哲学思想の受容を契機に体系化されていく。モンゴルにかぎらず、一般に、在来的な治療実践の経験にもとづく治療理論は、当初は萌芽的なものにとどまり、体系化されていない。それが生活水準の向上にともない、とりわけ当時の唯物論思想を受容して、それによりみちびかれて体系化されていくものである。

たとえば、インドやギリシアの古代医学理論は、いずれも四大元素思想にみちびかれて体系化されたし、また漢族の古代医学理論は、陰陽道および五行思想哲学によって体系化された。モンゴルの伝統的医学理論の発展もまた同様である。

十三～十四世紀のモンゴル族の世界観には、日と月、火と水、寒と熱、天と地、父と母といった二項対立の観

念がみうけられる。こうした観念の形跡は、多くの史料に記しとどめられている。たとえば、『飲膳正要』には「春夏秋冬の節季に病気になるのは、陰陽のいずれかが多くなる、あるいは当の状況に陰陽が不適になるところからくる」（注10）とするされている。当時は、内外の往来がはげしかったため、モンゴル族と漢族の文化交流がひろがり、漢族の古代占星術の影響および医学などの方面で哲学的綱領となっていた陰陽道の影響がモンゴルにおよぶようになっていたのである。当時のこうした哲学的思想は、モンゴルの伝統的治療にみられる寒熱二分法などの理論的発展をうながした。

十四世紀になると、インドの『金光経』を有名な訳者シラブセングがウィグル・チベット両言語からモンゴル語に翻訳したのにもない、古代インドのアーユルヴェーダにみられる「気・胆・痰」という病の種類・原因にかんする理論的概念（注11）、およびインド占星術の五大元素理論がモンゴルに受容され、モンゴル医学理論の発展に大きな影響をあたえた。

<チベット仏教の影響と理論の体系化>

十六世紀の末頃になると『医経八支』および『四部医典』がモンゴルにひろく普及した。

（1）『医経八支』は、古代インド（二～三世紀）のアーユルヴェーダ医学選集の一つであり、インドの思想家ロポンパポーの著作である。またこれは、のちに二百二十四巻におよぶ大蔵経のなかに編入された。

その理論的基盤は「気・黄・痰の理論」（前注11参照）「七つのタミルと三つのヒルに関する理論」（注12）にあり、いずれも古代インドの五大元素思想によりみちびかれたものである。

『医経八支』には「五蔵六腑の理論」や「黒占の五行思想」（注13）がみられない。この点が、『四部医典』と異なるところである。

十七、十八世紀には、グン・ゴンボジャブラの学者が大蔵経をチベット語からモンゴル語に翻訳することによって、そのなかにある『医経八支』『医経八支の解釈』およびその概説書『月光薬経』など古代インド医学のいくつかの大著作がモンゴル語に訳された。と同時に、木版印刷され、モンゴルにひろく普及した。以来、モンゴルの医者たちは古代インドの医学書をモンゴル語訳で直接まなぶことができるようになったため、古代インド医学の理論と経験はおおいに受容され、モンゴル民族の伝統的医学と容易に結合された。

古代インドの医学書群がモンゴルに普及すると、当時のモンゴル医学者たちはこれを積極的にまなび、研究し

ていた。たとえば、十八世紀の青海の有名なモンゴル医学者イシバルジョールは『四つの甘露』『認薬白晶薬鑑』の著作において、『医経八支』『月光薬経』など多くの書物を参照した、とのべている。(注14)

(2) 『四部医典』

『四部医典』は、チベットの大ユドク・ヨンドンゴンボ(708-833)が八世紀にチベット語であらわしたのち、十二世紀に小ユドク・ヨンドンゴンボが部分改訂してできあがった著作である。これは、チベット族の伝統的医学をもとにし、『医経八支』の理論と実践、および漢族医療の理論と実践、さらにモンゴルなど他民族の医療実践を受容して編纂された医学全集である。

『四部医典』のなかにある「気・黄・痰の理論」「七タミルと三ヒルの理論」および「占星術の五大元素思想」は、『医経八支』からうけついできたものであるが、「五臓六腑にかんする理論」と「黒占の五行思想」などは、漢族医療から受容した内容である。

しかし、これらの理論は、そのまま受容されたわけではない。むしろチベットの伝統的医療やチベットの風土とおおいに結合して変容的發展をとげている。たとえば『四部医典』のなかで六腑の一つとされるサムス(注15)は、漢族医療にある六腑の一つの「三焦」と対応しているものの、内容は異なる。単に六腑だけをとりても、このように異なる点は少なからず存在する。

この著作は、早くも十四世紀にモンゴルにはいったという記述もあるが(注16)、本当に流布したのは十六世紀後半以降、チベット仏教がモンゴルに普及してのちのことである。『四部医典』はモンゴルに普及したのち、モンゴル語に翻訳されて、清朝初期には木版印刷により流布した。こうして、モンゴル医者の中に『四部医典』をまなぶ人々がふえるにつれ、モンゴル医学の理論と経験はおおいに豊富になったのである。

<モンゴルの変容>

モンゴル民族の経済、生活習慣、風土などの特色に適合した、伝統的モンゴル医療の経験は、モンゴル医学理論の発展にとって、大きな基盤となっている。

十六世紀以前のモンゴルの伝統的医療では、上述したように、寒熱二分法、栄養摂取論、身体組織にかんする知識、振動による振動の治療といった、初期の理論的萌芽がみとめられる。それは、当時のモンゴル民族の世界観にみうけられる「帰納法的観念」(すなわち陰陽道と酷似した日月、火水、寒熱といった二項対立的理解)および『金光経』に略述された「占星術の五大元素思想」や「気・黄・痰の理論」の影響をうけてはいるものの、

いまだ体系化されてはいなかった。『医経八支』や『四部医典』が普及してはじめて、モンゴル医療の理論は真に体系化の時代をむかえることになる。

とりわけ特筆すべきことは、「占星術の五大元素思想」がモンゴルにひろまったことであろう。この思想が、モンゴル医学の理論を体系化する哲学的基礎となった。

こうしてしだいに、「五大元素思想」「ヒー・シャル・バトガン三因理論」「七タミルと三ヒルの理論」「臓腑の理論」などが主軸となって受容された。

そのさい、当時のモンゴル医学者らは『医経八支』『四部医典』などに記された理論、薬物知識、治療法を受容しながら、何世紀ものあいだの治療実践をへることによって、モンゴルの風土条件、身体特徴、生活特質などに適応させると同時に、それまでの伝統的モンゴル医療ともいきたかたちで結合させて、変容させながら発達させてきたのである。この変容の問題にかんして、いくつか例をあげておこう。

(1) 薬材調合の面

『医経八支』『四部医典』に記された薬物名は、モンゴルでは主としてチベット名でひろまった。しかし、この数百年間の治療実践のなかで、それらのチベット名をもつ薬物の約四割あまりが、現在のチベットでチベット医師が使用しているものとくらべると、チベット名は同じでも内容は異なるべく変化した。

たとえば、三子湯やマヌ四湯(注17)は、『医経八支』『四部医典』の調合法に記されており、またチベットでもモンゴルでもつねに使用されてきた薬である。これらに調合されている七つの薬剤の名は、モンゴル、チベットともに、arur-a, barur-a, jörör-a, manu, lideri, gand agari, gačaと同一名でよばれている。しかし、モンゴル医師の利用している薬剤は、ただ一つarur-aをのぞいて、すべてチベット医師のそれと異なっている。

こうした変化が生じた理由は様々であろう。主として、モンゴルでは入手しがたいものを、チベットにはないがモンゴルでは容易に入手できる、ないし植生しているといったもので代用しているうちに、治療実践のなかで、その効用が類似している、ないし特効がみとめられる、のみならずモンゴル人の身体に適合していることがわかった…といった状況がかんがえられる。

近代のモンゴル医師がもちいる調合法は、『医経八支』や『四部医典』の調合法さらに伝統的モンゴルのそれなどが主体となっている。また、そのほかに、漢族、ロシア、回族のそれも若干受容されている。(注18)

使用する調合法がおおきく変化したこと自体、薬材調合理論の発展をうながしたとおもわれる。

（2）治療面

『医経八支』や『四部医典』にある治療方法のなかには、モンゴルの伝統的治療経験とむすびついて受容されたものも少なからず存在する。

たとえば、イシダンジャンワンジル、アヨールロブサンなどの現代のモンゴル医師たちは、馬乳酒で治療するモンゴルの伝統的経験を『医経八支』や『四部医典』にある「三子湯」や「セマ三湯」（注19）などの薬による治療とむすびつけた。

（3）理論面

（a）寒熱拮抗統一理論

十六世紀以前からモンゴル医療において、寒熱理論は当時の治療をみちびく重要な綱領となっていた。十六世紀の末頃にモンゴルに流布した『四部医典』には、「病の性質は総じて寒熱二つに分類される」という思考が示されている。また、「熱性の病」が主として叙述されており、「寒性の病」や「寒熱が拮抗する病」については、項をたててとくに記述されてはいなかった。

ところが、十六世紀のイシバルジョールは、その著作『四つの甘露』のなかで「寒性の病の治療」「寒熱が拮抗する病の治療」というテーマをそれぞれ別に立項しており、寒熱理論を体系化している。

彼がこのように「寒性の病」と「寒熱が拮抗する病」を重視して記述したことは、伝統的モンゴル医療に寒熱二分法の理論的基盤があったことと密接に関係している。また、寒冷なモンゴルに存在してきた「寒性の病」についての研究と治療法が蓄積されてきた結果であることはいうまでもない。

イシバルジョールは『白露医法從新』『甘露点滴』『甘露彙集』という三作において、つねに「寒性の病」「熱性の病」「寒熱が拮抗する病」とそれぞれ章をもうけて記述しており、「重要な十の病」の章では寒性の病を重視してこれについて最初に記述している。こうした記載のされかたをみるだけでも、彼が寒熱の理論を重視したのは明らかである。しかも、それはすでに寒熱拮抗統一理論として発展したものであった。

（b）基礎六病の理論

基礎六病とは、気・黄（胆）・痰・血・黄水・虫の六つの病をさす。

『四部医典』の第一部『源の基礎』には、「気と痰は、寒性で水の如し、血と黄は熱性で火の如し、虫と黄水は寒熱双方の典型的存在」として示されている。これは、上述の六種の病を寒熱二種に収斂する観点から説明されたものである。ここでは、これら六つすべてが主要な基礎的病因としてあつかわれているわけではない。治療理論

の基盤にもなっていなかった。

これに対して、十八世紀のイシバルジョールは『甘露之泉』のなかで「三つの病因のほかに、さらに血・黄水・虫の三つをくわえて、基礎六病となる」とし、またこの六種類の病を「基礎六病」と明示している。これについて『甘露点滴』では「病を総括すると、気・黄（胆）・痰が各々単独なもので三つ、それぞれセットにしたものが三つ、三つをあわせたもの一つ、計七つとなる。しかし、主となるのは気・黄（胆）・痰・血・黄水・虫にもとづく六つの病である」と基礎六病の思想をよりいっそうふかめて明示した。

イシバルジョールのかんがえでは、基礎病を分析すると、三つの病因の単体、双体、総体などをくみあわせた七つにとどまらず、この三病因におさまらない、血の病、黄水の病、虫の病などをまたそれぞれ典型的性格をもち、病気の本質を決定する性質をもつ基礎病となる。そこで、これら3種をも基礎病にくわえ、そしてはじめて基礎病のかんがえかたが完全になるとされたわけである。

このようなとらえかたは、換言すれば、どれほど多種多様な病があろうとも、それらの主体をなす基本は、この六つに分類されるという理論である。

さらにイシバルジョールは『甘露点滴』『甘露彙集』を執筆するさいに、この「基礎六病」の観点を理論的基盤とし、いずれも最初にこの観点を大きなテーマとしてかかげている。そしてそのなかで、気の病、黄の病…と各々章をもうけて論を展開し、基礎六病の理論をよりいっそう完全なかたちに体系化している。

<現代モンゴル医学における基礎理論の研究>

モンゴル医学の基礎理論においては、人体は一つの全体とみなされ、生命活動のすべての内的関係が研究されてきた。のみならず、大局的観点から、人体と外的環境がまた一体としてとらえられたうえで、生命活動の基本原則が説明される。そして健康維持、予防を重視し、治療にさいして体力増進をはかることによって抵抗力をたかめ、総合的に治療するということが重視される。これがモンゴル医療の体系化された理論的基盤である。

こうした理論体系は広範囲にわたっており、つぎのように五つの内容にわけることができる。

- （1）陰陽道・五大元素の思想
- （2）生命活動にかんする解釈、認識
- （3）病の分類にかんする理論
- （4）診断理論
- （5）治療法にかんする理論

(1) 陰陽道・五大元素の思想

モンゴル医学の基礎理論は、経験をもとに成立した伝統的医学理論が、周辺民族の医学理論とむすびつき、さらにモンゴル民族の社会、経済、身体、生活習慣やモンゴルの風土等々、具体的状態に適合して変容しながら発展してきたものなので、それなりの特質を有している。そのなかでもとりわけ顕著な特徴は、つぎの二点であろう。

(a)陰陽道と五大元素思想の哲学にみちびかれた一体思想

(b)病の基礎的原因や病の性質に帰納させて分析し、治療する点

(a)一体思想

まずなによりも、人体を三要素「ヒー・シャル・バトガン」と新陳代謝「セタミル三ヒル」の合体として把握する。そして、三要素と新陳代謝の相互依存関係によって、受胎過程、受胎後の栄養吸収と汚物排泄、あらゆる器官の生命活動とそれらの相互関係を研究する。

さらに、人体と外部環境とを拮抗的統一体としてとらえ、とき、ところ、食、生活といった外部環境が人体にあたる影響および外部環境にあたる人体の反応などを研究する。

(b)帰納的分析

あらゆる病の基礎原因を「基礎六病」に帰納させて、まず、病因の観点から分析する。また、あらゆる病の性質を寒熱いづれかに帰納させ、病質の観点から分析する。さらに、それぞれの病の存在箇所を、五臓六腑、五官、脈、セタミルに帰納させ、病の存在箇所の観点から分析する。

以上の三つの分析を中心として、同時に、病の進行状態と関連づけて総合的に統一する。こうして、あらゆる面からの帰納的分析をおこない、診断し、治療方針をさだめる。

(2) 生命活動にかんする解釈、認識

主として、受胎のしくみ、人体の三要素理論、臓腑理論および五器官、脈の体系(注20)などの内容がふくまれる。なかでも、三要素と新陳代謝との相互依存関係を主体として、身体の拮抗的統一を研究する。

(3) 病の分類にかんする理論

主として、病因、病状の変化、基礎六病、寒熱理論などの内容がふくまれる。人体の三要素と新陳代謝の相互依存関係を中心にすえて、病因を基礎六病に帰納させ、病質を寒熱に帰納させて研究する。

(4) 診断理論

主として、問う・見る・触れるという三つの診断、兆

候のある病に対して効果的・逆効果的震撮をもちいた試験、および、それをもとにしておこなう帰納的分析などがふくまれる。こうして、十種類の注意「十の経」(注21)をもとにして、あらゆる面から客観的分析をおこない、病気の基礎原因、性質、箇所の三つを推測するものである。

(5) 治療法にかんする理論

主として、基礎的な病を「三つの時」(注22)すなわち病の進行段階と結合させて治療する、病の性質を寒熱に二分して治療する、震撮者を病とてあわせて治療する、振動による傷害を振動によって治療するなどふくまれる。

また、上述の一体的思想から身体の三つの病因と七つのタミルなどの相互関係を把握し、病気の基礎原因、性質、箇所の三つを病の進行段階とむすびつけて治療方針をさだめる。治療方針は、治療法の綱領となり、治療行為と直結するものである。具体的方法は、治療方針に依存する。

このほか、民間で伝統的におこなわれてきたマッサージ、産婆の技術、接骨術および多様なドムノホ法、塩湖での水浴、馬乳種療法、オラト地方につたわってきた山川柳をもちいる灸、オルドス地方に伝わってきた獣皮をもちいる療法、ウジムチン地方につたわってきた紐のむすび目でつねにもむ療法などの様々な治療行為は、モンゴル民族の伝統的医療の理論を研究し、さらに体系化するさいに、重要な資料となろう。

伝統的モンゴル医療の実践経験をもとに発展したこのような基礎理論は、長いあいだの実践のなかでたゆまずためされ、向上し、体系化されたのである。しかし、さらに発展させなければならないのは、我々の世代の使命である。客観主義にのっとり、文献資料にもとづき、さらに治療実践にそくして、モンゴル医学の基礎理論を研究していかなければなるまい。また、現代の自然科学的方法をもちいた研究もはじまっている。それゆえに、こうした基礎理論はまさに“汚物を排泄し、栄養を吸収して”よりいっそう研究され、体系的に発展していくにちがいない。

III. 訳注

- 注1 バターに茴香をまぜ、フェルトでタバコのように巻いて、皮膚にあてるというもの。
 注2 制圧者の意味。たとえばネズミにとってのネコがそうである。
 注3 フスフイの『飲膳正要』巻3には、馬乳酒の性格が「馬乳性冷味甘止渴治熱」と説明されている。

- 注4 局部を冷却する、いわば湿布療法。逆に、蒸気などで局部をあたためる熱性のジン療法もある。
- 注5 有名なチベット医の伝記『大ユドク・ヨンドンゴンポ伝』によれば、本療法はモンゴル伝来であるという。ジグメド著『蒙医簡史』31頁
- 注6 『新元史・ジョーハラ列伝』にはつぎのような記事がある。「1263年、宋との戦いで、ジョーハラの身体に三本の矢がささり、うち鎖肩にささったものが抜取できなかった。そこで、キプチャクは死罪としてとられた者二人をつれてきて、その肩を解剖させた。その結果、矢はぬけることがわかり、さっそく手術がおこなわれた。そのとき、ジョーハラは顔色ひとつかえなかった。」ジグメド著『蒙医簡史』53-54頁
- 注7 十八世紀のモンゴル医イシバルジョールの四部作『四つの甘露』には、このようにはっきりとモンゴル独特の治療法であることが記述されている。なお、この著作については、後注14参照
- 注8 ドムは、一般に妖術・魔術と訳されるモンゴル語であり、元来は呪術的なものであったとおもわれる。現在でも、治癒をいのって「エムドム、エムドム」ということがある。民間療法として現在でもひろくモンゴルにみうけられるドムは、落馬のさいなどの脳震盪に対する治療行為である。地域、症状または治療者によって、つぎのような様々な方法がみられる。人をあおむけにねかせて足のうらに板を垂直にあてておき、これをたたく。あらかじめ頭部のはいる穴をほって人を大地にねかせ、頭部周辺を大槌でたたく。はしをかませしておき、頭部に茶碗をのせてこれをたたく。ねじりはちまきをさせて、はちまきの端を棒でたたく。また、同様の方法がラクダにももちいられたらしい。ジグメド著『蒙医簡史』110頁
- 脳のほか、内臓や胎児の位置ずれに対する治療行為もドムにふくまれる。ジグメド著『蒙医簡史』56頁
- 家畜の場合は、子ヤギやラクダが腎下垂になりやすいという。これをモンゴルでは「腎臓が落ちた」と表現する。この場合、子ヤギに対しては、杯を腹にあて、きつめにしばっておくと、しばらく横になっているが、数日後に回復するという。しかし、ラクダに対しては無策で回復しないといわれている。
- 注9 ジグメド（吉格木徳）著「蒙医史初探—古、近代蒙医史三傘発展段階」ではじめて、こうした理論的解釈がこころみられた。
- 注10 前注3上掲書の巻1に「春夏秋冬四時陰陽生病起於過與蓋不適其性」とある。
- 注11 生命体の三大基本要素にかんする理論。三つの要素はモンゴル語でそれぞれ「ヒー」「シャル（ス）」「パトガン」とよばれる。また漢字をもちいて「気」「黄（胆）」「痰」と意識される。身体を形成する三物質を意味し、これらの多少によって病が生じるとかんがえられている。したがって、健康にかんして論ずるさい（生理的）には「生命体三要素理論」となる一方で、病について論ずるとき（病理的）には「三病因理論（三邪学説）」となる。アーユルヴェーダにおける「ヴァタ」「ピタ」「カパ」に相当するであろう。
- 注12 「七つの力」で栄養吸収をあらわし、「三つの汚れ」で汚物排泄をあらわした、新陳代謝にかんする理論。前者は、透明とよばれる栄養分、血、肉、脂肪、骨、髄、精子・卵子、の七つをさす。後者は、尿、糞、汗、の三つをさす。アーユルヴェーダにおけるセダーツと三マラに相当するであろう。
- 注13 モンゴルでは、インドの占星術に対して、中国の占星術を「黒占」という。インドの占星術において、世界を形成する五大元素は、土・水・火・気と天であるのに対して、「黒占」では、木・火・土・水の五つとなる。モンゴル医学におけるこれらの概念などについては、同著者の専論がある。ジグメド著「五大元素研究について」『蒙医学術論文集』1983、207-222頁
- 注14 イシバルジョールについては、同著者が1984年第二回中国全国医師学会議で発表している。『四つの甘露』とは、甘露（アラシャー）と題された四部作をさす。それぞれ『甘露之泉』『白露医法從新』『甘露点滴』『甘露彙集』と中国語訳される。これらの著については、ジグメド著「蒙医学古典著作考略」で概略が紹介されている。
- 注15 サムスは、卵巣や精巣をさすという。ジグメド著『蒙医基礎理論』261-265頁
- 注16 ソビエト医学百科にそのような記事があるらしい。
- 注17 マヌを主成分とし、四種類の薬剤を調合した、せんじ薬。
- 注18 元代、上都にたてられた回々薬物院には、全三十六巻からなる薬剤調合書があったが、現在までつたわっているのは四巻にとどまる。
- 注19 セマを主成分とし、三種類の薬剤を調合したせんじ薬で、り尿剤としてもちいられる。

- 注20 脈には、赤と白の二種類があり、赤が血管網、白が神経網をさす。
- 注21 病因、条件、箇所、季節、人の性格、年齢、住環境、時、食、尿という十種類の項目にわたって診断をおこなう。これを『四部医典』では「十の経」と称している。
- 注22 病の進行は、潜伏期間、発病期間、回復期間の三段階に区分され、これを「三つの時」と称す。ジグメド著『蒙医基礎理論』292頁
- 後注 『医経八支』および『四部医典』は、それぞれアシュタンガ、ギユ・シに相当する。

ジグメド氏著作目録

◎著書 (いずれもモンゴル語)

『蒙医基礎理論』1984、呼和浩特、内蒙古人民出版社
『蒙医簡史』1985、赤峰、内蒙古科学技術出版社

◎論文

漢語によるもの

「蒙医史初探之二」『蒙医史研究資料(二)』内蒙古医学院蒙医基礎理論教研室編、1980、1-8頁

「蒙医史初探」『中華医史雜誌』11-4、1981、244-248頁

「出的蒙古族医学家伊希旺吉拉」『同上』13-4、1983、255-258頁

「蒙医学古典著作考略」『中国医薬学報』3-1、1988、33-34頁

モンゴル語によるもの

「蒙医史初探」『内蒙古大学学报・哲学社会学版』1977.2、頁117-137および1978.1

「五大元素研究について」『1980年全国蒙医学会資料』27-33頁

「モンゴル著名医イシダンジンワンジルについて」『同上』70-77頁

「イシバルジョール考」『1984年第二回全国蒙医学会資料』

「五大元素研究について」『蒙医学術論文集』1983、207-222頁

「モンゴル医学の基礎理論の発展史」『内蒙古医学院論文集』1986、56-59頁

(1989.2.1受付)